B-78 シルエットの違いにおける動作とゆとり量の関係
東京家政大学家政・木曾谷かず 中里善子 安田直子 ○山田民子

目的　流れに限りなく出現するが、これを着用した場合、人間の動作とゆるみには適合
した法があると考えられる。上腕上半帯による機能難の変化などを部分的な実験の報告が既にな
されているが、今回はウェアース・ドレス3種を制限着用実験を行ない、シルエットによ
る動きの変化とゆるみの適合法を、数値の上からとる目的で実験し分析した。
方法　実験材料は、厚さ0.283mm 平面重0.01069g/cm² 網目度30% 横30% の天然
木綿を用い、着用実験着は今回ウェアースに切り替えのあるウェアース・ドレスに
切り替えないウェアース・ドレスを基本とし、ウェアース・ドロッパのビッグなウェアイ
ース・ドレス1種を加えて実験を製作した。着用実験は、運動選手の大きい腕の動作とし
て上腕上半帯（115° 70° 135°），上腕下半帯（115° 70° 135° 105°），又了体前側姿勢
による動きの変化を写真撮影によってみた。
結果　骨中心反射体表面の中心とウエアース線との交点を（A）、ヒップ線との交点を
（B）とする。体表面においては2本足尖点の中央を（C）とし、体表面の縦点の中央を
（D）と定めて動作による距離を測定したところ、両上半帯の場合、基本型の体表面に
においては、45°より135°の上半帯の者がAD間が長くなる。体表面においても45°より135°の上
半帯の方がA間が長くなる。スペースウェアース・ドレスとウェアース・ドレスを着用
して同じ動作を比較すると、AD間の距離はウェアース・ドロッパのドレスの方が短くなる。

B-79 ヨークの高さとゆとり量の関係
東京家政大学家政・大江真子 長藤こずえ 藤本京子 松本純子
木曾谷かず

目的　上肢の動作によって、上臂筋の筋肉に動態と隆起がおきる。在来から部の
ゆとりが変化し、動作が安定であることは経験上、納得していることがある。我々は被服
形態の一つとしてウェアースドレスをとりあげ、特に上臂でのヨークにスポーツをして、ヨー
クの高さに上肢の動作にともなうゆとり量に影響することを着用実験して数的処理し、
経験的見解を蓄えた。
方法　実験材料は、厚さ0.283mm 平面重0.91069g/cm² 網密度30% 網目度27% の
天然木綿を用い、着用実験着はウェアースドレスをし、被服者に標準体型の成人女性4名
を選ばヨークの切換の位置を設定し、実験の製作を行なった。着用後上肢の上半（115°
135°）を側面と前面で行ない、テスト線を（A）とし、テスト線（B）とし、ウエア
ース線（C）を定め、写真撮影によってBC間の長さを計測した。更にゆとり（2cm）をギャ
ザーやタックのニ方法にし、骨中心線の形状、テスト線、ウエアース線間、生じるゆとりの状
況を検討した。
結果　ヨークの切換線の高いほど上半は少し、BC間の長さは短くなり、スカー
ト丈はヨークの切換線の低くなるほど短くなっつ上半が上半でき、ゆとり量の処理として用いた
ギャザーやタックによるテスト線、ウエアース線間生じるゆとりの数及び方向に相違が見
られた。